

発掘調査の概要

藤原宮大極殿院南門の調査 飛鳥藤原第148次)

都城発掘調査部では、今年4月から藤原宮大極殿院の南門を発掘調査しています。1940年の日本古文化研究所による部分的な発掘調査により、門基壇の外装に用いられた石材を11個確認し、それを根拠として基壇の規模を長さ100尺程、幅を大体50尺と推定しています。しかし、礎石などは確認されず、南門の具体的な構造も不明のままでした。

本調査部では、藤原宮中枢部の詳細な構造を解明していく調査を継続してきました。その一環として、南門基壇の正確な規模やその築成方法、南門自体の規模や構造、大極殿院回廊との関係、儀式用施設の有無などを明らかにすることを目的として調査をおこなったものです。

調査の結果、南門に関する新たな知見をいくつか得ることができました。まず、基壇については、基壇外装の石材を後世に抜き取った痕跡を検出し、それを丁寧にたどっていきました。その結果、基壇の規模は東西39.1m、南北14mになることが判明し、古文化研究所の推定よりも大きくなることが明らかとなりました。これまで確認されている宮殿遺跡の大極殿院南門の中では最大級です。

基壇の中央部には、竜山石（兵庫県加古川下流右岸に産する石材）の切石列が残っていました。これは、古文化研究所は基壇外装の一部と考えていたのですが、今回の調査によって、北面階段の一段目である可能性が強まりました。さらに、南・北面階段の東

西幅は24.7mと非常に広いことも明らかになりました。

一方、基壇外装はほとんど抜き取られていましたが、わずかに残る破片から、二上山産の凝灰岩であることがわかりました。一つの建物の階段と基壇外装とで、石材を使い分けていたようです。

さらに注目できるのは、基壇を築く前にその範囲を一回り広く、深く掘り込み、土を一層ずつ敷いて搗き固めている点です。これを「掘込地業」と呼ばれる地盤改良の方法です。藤原宮において掘込地業を持つ建物は初めての例で、地業の深さは少なくとも1m以上と深く、敷いた土を搗き棒（先端が径6～8cmの円形）で搗き固めた痕跡も無数に確認することができました。

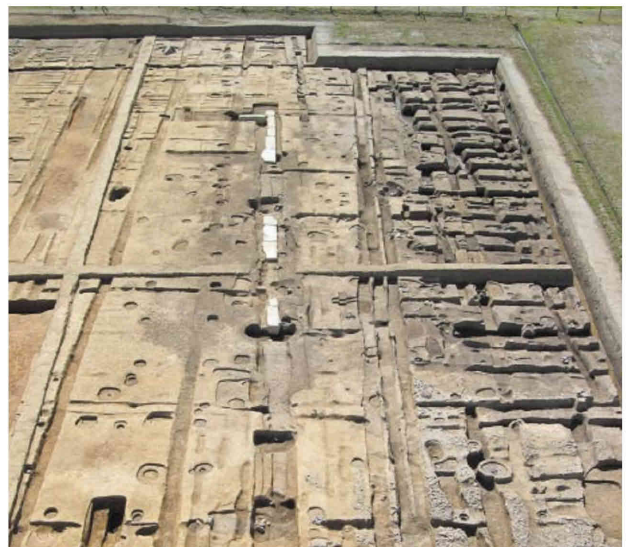
『続日本紀』大宝元年（701）正月条には、文武天皇が大極殿に出御して元日朝賀の儀式をおこなったとあります。その際、正門（南門）に様々な幢幡（旗）を立てていました。大極殿院は天皇の儀式空間であり、特に南門は天皇みずから出御して朝堂院に参集した官人と対面する儀式の場でもありました。先に述べた掘込地業の状況や基壇の規模からも、南門が巨大な建物であったことは明らかで、儀式の場としてもふさわしい威容を誇っていたと考えられます。

残念ながら、基壇は後世の削平が著しく、南門自体の礎石の据付穴などは全く確認できませんでした。また、幢幡を立てた痕跡の有無などもこれから確認する予定です。発掘調査はいまも続いています。当初予定した課題の解明に向けて、今後も慎重に調査をおこなっていく予定です。

（都城発掘調査部 高田 貫太）



調査区と大極殿、耳成山（南から）



南門基壇の北辺部（東から）